

「美術館教育へのアプローチ ～ワークショップほか Hands-On, VTS, AL...手法を探る～」
前田ちま子

日本の美術館・博物館は 20 世紀後半から海外の動きに触発され、特に美術館は著しく教育普及活動を展開させました。ハンズオン、ワークショップ、VTS (Visual Thinking Strategies 対話型鑑賞法) といった始めて出会う言葉そのものにワクワクしながら新しい出会いに向き合っていました。米国で始まったこれらの手法には鍵となる人物がいます。ハンズオンに関しては、ボストンこども博物館の元館長マイケル・スポックとエクスプロラトリウムの創始者フランク・オッペンハイマー、ワークショップではニューヨーク近代美術館の初代教育部長ビクトル・ダミコ、VTS では三代目教育部長フィリップ・ヤノウィンです。スポックは子どもたちの学びが文字からだけではないことを体現しました。ダミコは美術館における教育の可能性を多様に試行錯誤し実践を重ねていきました。ヤノウィンは個人がそれぞれに蓄積する鑑賞の経験をいざなうメソッドを認知心理学者アビゲイル・ハウゼンの研究から共に展開しました。一方国内でも独自に具体的な教育活動を進めた館に原動力となる存在もありました。

本講演ではそれらの経緯に加えて、スポックやヤノウィンとのインタビューの話を交え、また現在も存続している“Victor D’Amico Institute of Art (通称 Art Barge)” の教育プログラムを含め、今後の美術館教育を考えるきっかけにしたいと思います。

また美術館のような環境がない中で美術と子どもたちのための企画を立てる手だてを 2015 年 3 月で閉館した“こどもの城”造形スタジオのコンセプトと実践活動から「展示・体験・制作」の構成を通して言及したいと思います。そこにはダミコの他に特別企画として取り上げた美術教育のパイオニアであるフランツ・チゼック、視覚言語を追求したアーティストのブルーノ・ムナーリの仕事も大きく影響しています。また専門ではないスタッフと美術館の教育プログラムを生み出すプロセスについて、大学と美術館の連携活動を振り返りながら提案します。アクティブ・ラーニングについては美術と英語をテーマにした協同学習とワークショップに VTS を含めた試みから少し触れたいと思います。

21 世紀になり世界が大きく変動する中で、美術館教育はどのような発展を遂げるのでしょうか。30 数年前にミュージアムと教育について考え始めた時に社会の中の美術教育の機能を美術館に限らず博物館全体に位置づけた意図は、人々の原初的で素朴な興味と関心をもとに雑録的観察眼による常に新たな見方を喚起し継続するモノと人と場の関係性にありました。今それを思い起こしながら、これからの美術館は老若男女の人々が幸せに生きるための場として専門性とジャンルを超えたアプローチから教育的機能を果たす必要があるように思えてなりません。